

## 271 選択的卵管造影法の治療的意義に関する研究

虎の門病院 産婦人科

山田義治, 木下優子, 佐々木総子, 塩田恭子,  
東梅久子, 横尾郁子, 宮川智幸, 伊豆田誠人,  
佐藤孝道

【目的】選択的卵管造影(以下SSG)の治療的意義を明らかにすること。【方法】1991.6-1995.7に当科で施行したSSG後に妊娠が成立した症例の解析。【結果】①SSG施行81例中IVF-ET妊娠8例を除き20例(24.7%)に妊娠が成立した(平均観察期間25.1ヵ月)。②内訳は自然妊娠14例,人工授精(以下AIH)5例,GIFT法1例,平均年齢は32.4±2.7才,平均不妊期間は3.1±1.4年であった。③SSG後妊娠までの期間は3ヵ月以内6例,4-6ヵ月5例,7-12ヵ月4例,13ヵ月以上5例で,平均7.7ヵ月。過半数の症例が6ヵ月以内に妊娠した。④SSGが妊娠の成立に効果的であったと推定される症例は14例(SSGの17.2%)であった。内訳は子宮卵管造影(以下HSG)で両側閉塞とされSSGで少なくとも一方の卵管疎通性が確認された後の妊娠が2例(2.4%),HSGでは片側閉塞でSSGで当該卵管が開通した例が12例(14.8%)である。⑤HSGで片側閉塞でSSGでも当該卵管の開通がなく対側卵管が妊娠に貢献したと思われる例が4例(4.9%),SSGでも両側の疎通性が確認されなかった例(片側卵管切除1例を含む)が2例(2.4%)あった。⑥SSG後の不妊治療に関しては,妊娠までの期間6ヵ月以内の11例には自然妊娠8例,AIH3例であった。なお,AIHは3例とも1回目に妊娠が成立した。⑦妊娠の転帰は,正常分娩8例,流産1例,妊娠継続中3例,不明5例,子宮外妊娠3例(妊娠例の15%)であった。子宮外妊娠のうち2例はSSGでも両側疎通性が認められなかった。【結論】①SSGの治療的意義が明らかになった。②SSGの妊娠は過半数が6ヵ月以内に起こった。③SSG後妊娠は子宮外妊娠のハイリスク群である。

## 272 妊娠前子宮内膜所見と妊娠予後の関連性についての検討

琉球大

正本 仁, 宮城博子, 神山 茂, 稲福 薫,  
東 政弘, 金澤浩二

【目的】子宮内膜環境が妊娠成立後の予後に及ぼす影響を調べるために,子宮鏡検査後に妊娠が成立した例において,子宮内膜所見の良・不良とその後の妊娠予後との関連を検討する。【方法】対象は当科にて子宮鏡を施行し,その後妊娠が成立した不妊症患者168例で,生化学的流産,子宮外妊娠に終わった例は除外した。子宮鏡による内膜評価は,妊娠前自然月経周期の高温相7-10日目,いわゆる着床期付近で行い,当科の分類に基づきその時期に内膜表面にリング状の腺開口と十分に発達した血管を認めるものを良好な内膜と定義し,対象を子宮鏡所見にて内膜良好群,内膜不良群の2群に分け,両群間で妊娠予後を比較した。【成績】対象168例中,内膜所見が良好であった内膜良好群が98例,不良であった内膜不良群が70例となり,平均年齢に関しては両群間で有意差は無かった。流産に関しては,内膜良好群では98例中13例(13.3%)に発生したのに対し,内膜不良群では70例中24例(34.3%)に発生し,有意に内膜不良群で高い発生率となっていた。また流産の内訳を見ると,胎児心拍確認後の流産に関しては,内膜良好群では4例(4.1%)に発生したのに対し,内膜不良群では12例(17.1%)に発生し,同じく不良群で有意に高い発生率となっていた。枯死卵に関しては,内膜良好群では9例(9.2%)に発生したのに対し,内膜不良群では12例(17.1%)に発生し,不良群に高い傾向を認めたが有意差は無かった。【結論】流産発生率が内膜不良群に有意に高く,子宮内膜環境の悪さと流産の発生との間に密接な関係があることが示唆された。